

日本航海学会誌

NAVIGATION

21世紀の新しい針路を求めて

静水圧の圧力積分による船の浮心位置の決定
— その4：三角柱に対する証明 —

堀 勉

*A Positioning on Ship's Centre of Buoyancy
Derived by Surface Integral of Hydrostatic Pressure
— Part 4 : The Proof for Triangular Prism —*

Tsutomu HORI

令和2年

7月

第213号



研究・調査

静水圧の圧力積分による船の浮心位置の決定 — その4 : 三角柱に対する証明 —

堀 勉

A Positioning on Ship's Centre of Buoyancy Derived by Surface Integral of Hydrostatic Pressure — Part 4 : The Proof for Triangular Prism —

Tsutomu HORI

キーワード: 浮心, 圧力中心, 三角柱, 静水圧, 圧力積分

1. 前書き

船に作用する浮力の中心「浮心」は、水面下の体積（排水体積）を水で置き換えた重心（即ち、水面下の幾何学的形状の体積中心）に等しいことは、造船学上、否、物理学上の周知の事実である。

Archimedes の原理⁽¹⁾が教える浮力は、静水圧の圧力積分によって明快に求められるが、浮心位置については、物理学や水理学、造船学や航海力学など、どの教科書（例えば、第1報⁽²⁾の参考文献(2)~(16)）にも、水面下の体積を水で置き換えた重心位置であると記述されていて、静水圧による圧力中心としての説明は見当たらない。

そんな状況の中、10年ほど前、小松⁽³⁾によって、「浮心≠圧力中心？」の問題提起が成され、日本船舶海洋工学会の推進性能・運動性能合同研究会等で、瀬戸^{(4),(5)}、鈴木(勝)⁽⁶⁾、芳村・安川⁽⁷⁾、小松⁽⁸⁾、藪下⁽⁹⁾、慎⁽¹⁰⁾らによって、活発に議論が成された。

この問題に対して、著者は、この航海学会誌上で、第1報⁽²⁾と第2報⁽¹¹⁾において、鉛直方向の圧力中心を定められない原因は、直立状態では、水平方向の力が平衡してゼロになる為であると考え、その打開策として、船を θ だけ横傾斜させた状態で、静水圧を圧力積分し、船に固定して傾斜した座標系に関して、作用する力とモーメントを計算した。その場合、合力の両成分ともゼロにならな

いことから、傾斜時の圧力中心を決定し得ることを示した。その結果を、 $\theta \rightarrow 0$ とすることで、圧力中心が、直立状態での水面下の図心、即ち、周知の浮心に位置することを、矩形断面⁽²⁾に続いて、任意の横断面形状⁽¹¹⁾について証明した⁽¹²⁾。

この問題については、一色⁽¹³⁾や藪下⁽¹⁴⁾は、重力の作用方向を、鉛直方向から傾斜させることにより、「浮心=圧力中心」であることを示した。その後、藪下ら⁽¹⁵⁾は、浮体や重力の作用方向を傾斜させるのではなく、座標系のみを傾斜させることで、同様の結論が得られることを示した。一方、鈴木(勝)⁽¹⁶⁾、小松^{(17),(18)}、一色⁽¹⁹⁾が、種々のアプローチで、この問題に対して検討を加え、議論も深まってきた。

このような状況に鑑み、著者は、第3報⁽²⁰⁾として、傾斜しても水面下の形状が変化しない半没円柱についても、「浮心=圧力中心」であることを証明した。

この第4報では、三角柱について、同様な手法により、「浮心=静水圧の圧力中心」であることを証明する。前報⁽²⁰⁾の半没円柱と同様、任意形状⁽¹¹⁾の証明に含まれるものであるが、矩形⁽²⁾や半没円柱⁽²⁰⁾と共に典型的な断面形状であるので、これを公表することも、強ち無意味ではないと考え、ここにご報告させて頂く次第である。

2. 三角柱の圧力中心 C_p の位置決め

図1は、三角柱（幅 $2b$ 、吃水 f 、乾舷 h 、頂角 2ϕ ）が、右舷側に θ だけ横傾斜した場合の横断面を示す。ここに、直立時の三角柱の水線の半幅 b は、吃水 f と半頂角 ϕ を用いて、

$$b = f \tan \phi \dots\dots\dots(1)$$

と書ける。この三角柱の横断面は、底辺(甲板長) $2(f+h)\tan\phi$ 、高さ $f+h$ 、両辺 $(f+h)\sec\phi$ の二等辺三角形である。

2.1 左右両舷の浸水長などの準備計算

図1の水線付近の露出部(左舷 *Left*)の三角形 $\Delta oE_L T_L$ と没入部(右舷 *Right*)の三角形 $\Delta oE_R T_R$ について、 $x_L = \overline{U_L E_L}$ 、 $x_R = \overline{U_R E_R}$ は、それぞれの三角形の高さ $q_L = \overline{U_L T_L}$ 、 $q_R = \overline{U_R T_R}$ に対して、幾何的に、

$$\left. \begin{aligned} q_L &= (b - x_L) \tan \theta = \frac{x_L}{\tan \phi} \\ q_R &= (b + x_R) \tan \theta = \frac{x_R}{\tan \phi} \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots(2)$$

の関係にあるから、

$$\left. \begin{aligned} x_L &= (b - x_L) \tan \phi \tan \theta \\ x_R &= (b + x_R) \tan \phi \tan \theta \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots(3)$$

である。 x_L, x_R は、半幅 b に対して(1)式の関係を用いて、解くことにより、

$$\left. \begin{aligned} x_L &= \frac{\varepsilon}{1 + \varepsilon} f \tan \phi \\ x_R &= \frac{\varepsilon}{1 - \varepsilon} f \tan \phi \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots(4)$$

のように求まる。但し、式中の ε は、半頂角 ϕ と横傾斜角 θ それぞれの正接の積として、

$$\varepsilon \equiv \tan \phi \tan \theta \dots\dots\dots(5)$$

で定義したものである。

次に、左右両舷側における、乾舷の増分長 s_L と、減分長 s_R は、それぞれ、

$$\left. \begin{aligned} s_L &= \frac{x_L}{\sin \phi} = \frac{\varepsilon}{1 + \varepsilon} f \sec \phi \\ s_R &= \frac{x_R}{\sin \phi} = \frac{\varepsilon}{1 - \varepsilon} f \sec \phi \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots(6)$$

となる。

よって、左右両舷側の浸水長 l_L, l_R は、

$$\left. \begin{aligned} l_L &= f \sec \phi - s_L = \frac{1}{1 + \varepsilon} f \sec \phi \\ l_R &= f \sec \phi + s_R = \frac{1}{1 - \varepsilon} f \sec \phi \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots(7)$$

である。

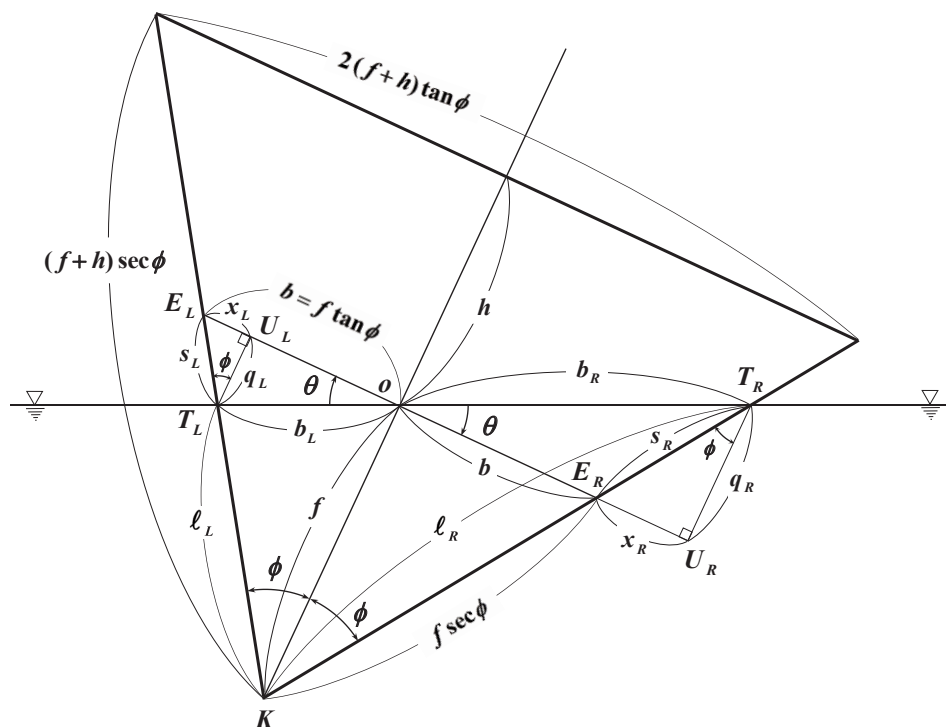


図1 横傾斜した三角柱の横断面

また、左右両舷側の水線幅 b_L, b_R は、(3)式の x_L, x_R を用いて、

$$\left. \begin{aligned} b_L &= (b - x_L) \sec \theta = \frac{1}{1 + \varepsilon} f \tan \phi \sec \theta \\ b_R &= (b + x_R) \sec \theta = \frac{1}{1 - \varepsilon} f \tan \phi \sec \theta \end{aligned} \right\} \dots(8)$$

のように求まる。よって、水線幅は、

$$b_L + b_R = \frac{2}{1 - \varepsilon^2} f \tan \phi \sec \theta \dots\dots\dots(9)$$

である。

よって、 θ だけ横傾斜した三角柱の、水面下の三角形 $\triangle K T_L T_R$ の面積 A は、

$$A = \frac{1}{2} (b_L + b_R) \cdot f \cos \theta = \frac{1}{1 - \varepsilon^2} f^2 \tan \phi \dots(10)$$

であり、直立状態 ($\theta = 0$) の

$$A \Big|_{\theta=0} = f^2 \tan \phi \dots\dots\dots(11)$$

より、 $\varepsilon^2 A$ だけ、水面下の面積が増加している。

2.2 三角柱表面に働く圧力による力

図1の三角柱の横断面に働く圧力分布と、その積分値である力を、図2に示す。

座標系は、静水面中央に原点 o を置き、 z 軸を鉛直下向きに取った空間固定座標系を $o-yz$ 、三角柱に固定して傾斜した座標系を $o-\eta\zeta$ とする。

大気圧を p_0 、水の比重量を γ とし、大気圧を破線、静水圧 γz を実線、それぞれの圧力を細線、力を太線のベクトルで示して、全て、三角柱表面に対して、垂直方向に作用する。

船底に当たる三角形の頂点 K の水深 Z_f は、

$$Z_f = f \cos \theta \dots\dots\dots(12)$$

である。

左舷 (*Left*)、右舷 (*Right*) に働く力 P_{Left}, P_{Right} は、それぞれ舷側全体に働く一様分布の大気圧による $P_{Left}^{(0)}, P_{Right}^{(0)}$ と、没水部に働く三角形分布の静水圧による $P_{Left}^{(\gamma)}, P_{Right}^{(\gamma)}$ の和で求まるから、(7)式の浸水長 ℓ_L, ℓ_R を用いて、

$$\left. \begin{aligned} P_{Left} &= P_{Left}^{(0)} + P_{Left}^{(\gamma)} \\ &= p_0(f+h) \sec \phi + \frac{1}{2} \gamma Z_f \ell_L \\ &= p_0(f+h) \sec \phi + \frac{1}{2} \gamma f^2 \frac{\sec \phi \cos \theta}{1 + \varepsilon} \\ P_{Right} &= P_{Right}^{(0)} + P_{Right}^{(\gamma)} \\ &= p_0(f+h) \sec \phi + \frac{1}{2} \gamma Z_f \ell_R \\ &= p_0(f+h) \sec \phi + \frac{1}{2} \gamma f^2 \frac{\sec \phi \cos \theta}{1 - \varepsilon} \end{aligned} \right\} (13)$$

となる。甲板 (*Upper*) に働く力 P_{Upper} は、大気圧による $P_{Upper}^{(0)}$ のみが作用するから、

$$\begin{aligned} P_{Upper} &= P_{Upper}^{(0)} \\ &= 2 p_0(f+h) \tan \phi \dots\dots\dots(14) \end{aligned}$$

となる。

2.3 η 方向と ζ 方向の合力 $F_{-\eta}, F_{-\zeta}$

浮体固定の $-\eta, -\zeta$ 方向に働く合力 $F_{-\eta}, F_{-\zeta}$ は、(13),(14)式の $P_{Left}, P_{Right}, P_{Upper}$ を用いて、

$$\left. \begin{aligned} F_{-\eta} &= P_{Right} \cos \phi - P_{Left} \cos \phi \\ &= \frac{1}{2} \gamma f^2 \cos \theta \left(\frac{1}{1 - \varepsilon} - \frac{1}{1 + \varepsilon} \right) \\ &\quad + p_0(f+h) - p_0(f+h) \\ &= \gamma f^2 \frac{\varepsilon}{1 - \varepsilon^2} \cos \theta = \gamma A \sin \theta \\ F_{-\zeta} &= P_{Right} \sin \phi + P_{Left} \sin \phi - P_{Upper} \\ &= \frac{1}{2} \gamma f^2 \tan \phi \cos \theta \left(\frac{1}{1 - \varepsilon} + \frac{1}{1 + \varepsilon} \right) \\ &\quad + 2 p_0(f+h) \tan \phi - P_{Upper}^{(0)} \\ &= \gamma f^2 \frac{\tan \phi}{1 - \varepsilon^2} \cos \theta = \gamma A \cos \theta \end{aligned} \right\} (15)$$

のように、それぞれ浮力 γA の傾斜角 θ に関する正弦成分と余弦成分として求まる。この結果から、大気圧 p_0 は相殺して、浮体に作用する合力には寄与しないことが分かる。

2.4 y 方向と z 方向の合力 F_{-y}, F_{-z}

水平成分 ($-y$ 方向) の F_{-y} 、鉛直成分 ($-z$ 方向) の F_{-z} を、前節の $F_{-\eta}, F_{-\zeta}$ を座標変換して求める。水平成分の F_{-y} は、

$$\begin{aligned}
 F_{-y} &= F_{-\eta} \cos \theta - F_{-\zeta} \sin \theta \\
 &= \gamma A (\sin \theta \cos \theta - \cos \theta \sin \theta) \\
 &= 0 \quad \dots\dots\dots(16)
 \end{aligned}$$

となつて、横傾斜して左右非対称な場合でも、合力の水平成分は生じない。鉛直成分の F_{-z} は、

$$\begin{aligned}
 F_{-z} &= F_{-\zeta} \cos \theta + F_{-\eta} \sin \theta \\
 &= \gamma A (\cos^2 \theta + \sin^2 \theta) \\
 &= \gamma A \quad \dots\dots\dots(17)
 \end{aligned}$$

のように、比重量 γ と、(10)式に示す三角柱の水面下の横断面積 A の積で得られていて、Archimedes の原理が教える、浮力である。

この F_{-y} 、 F_{-z} については、(13),(14)式の P_{Left} 、 P_{Right} 、 P_{Upper} から、直接、求めることもできる。

実際、水平成分の F_{-y} は、

$$\begin{aligned}
 F_{-y} &= P_{Right} \cos(\phi + \theta) - P_{Left} \cos(\phi - \theta) + P_{Upper} \sin \theta \\
 &= \frac{1}{2} \gamma f^2 \sec \phi \cos \theta \left\{ \frac{\cos(\phi + \theta)}{1 - \varepsilon} - \frac{\cos(\phi - \theta)}{1 + \varepsilon} \right\} \\
 &\quad + p_0(f + h) \\
 &\quad \times [\sec \phi \{ \cos(\phi + \theta) - \cos(\phi - \theta) \} + 2 \tan \phi \sin \theta] \\
 &= -\gamma f^2 \sec \phi \cos \theta \frac{\sin \phi \sin \theta - \varepsilon \cos \phi \cos \theta}{1 - \varepsilon^2} \\
 &\quad - 2p_0(f + h) \sin \theta (\sin \phi \sec \phi - \tan \phi) \\
 &= 0 \quad \dots\dots\dots(18)
 \end{aligned}$$

となり、鉛直成分の F_{-z} は、

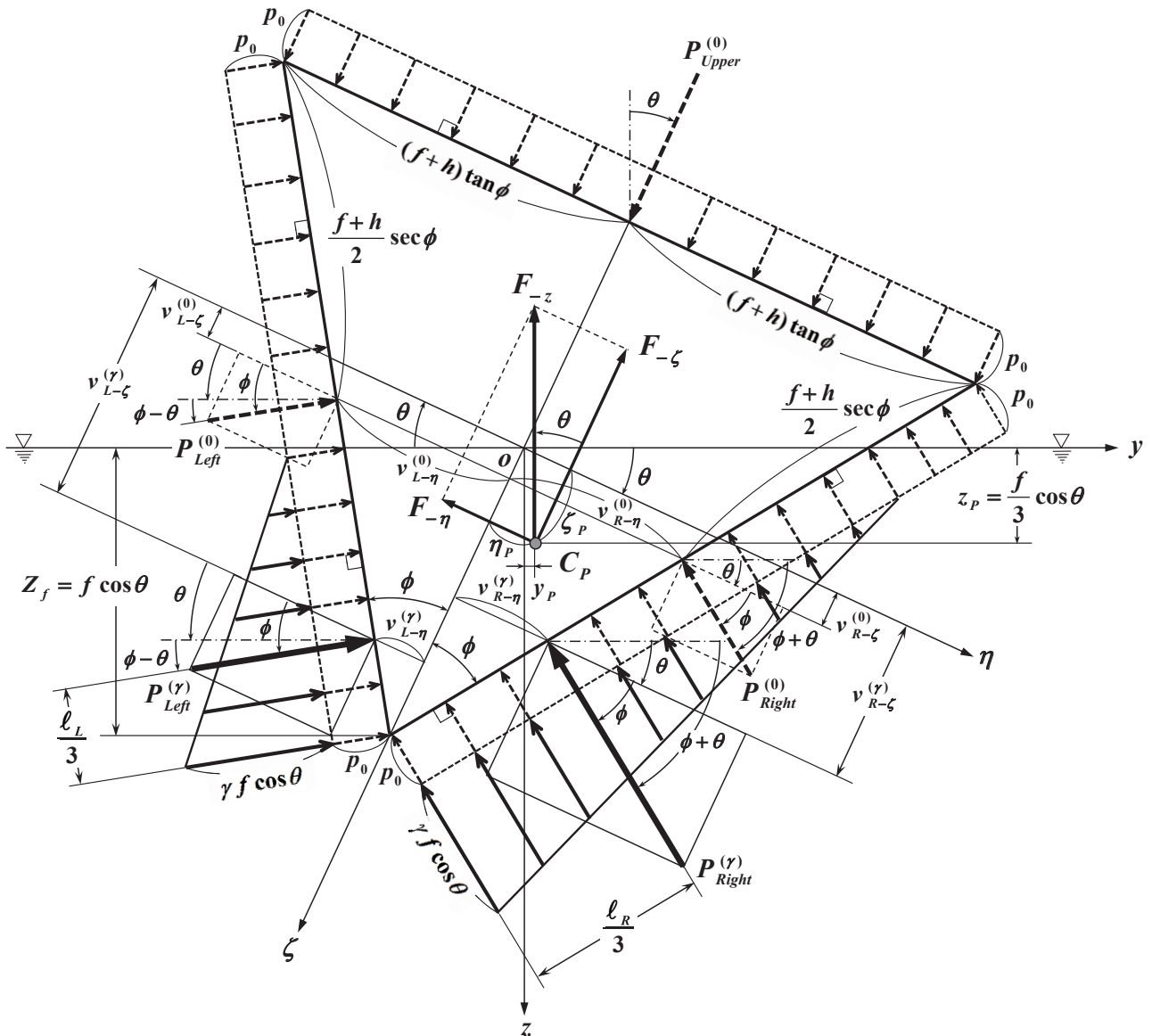


図2 横傾斜した三角柱の横断面に作用する静水圧の分布と圧力中心

$$\begin{aligned}
 F_{-z} &= P_{Right} \sin(\phi + \theta) + P_{Left} \sin(\phi - \theta) - P_{Upper} \cos \theta \\
 &= \frac{1}{2} \gamma f^2 \sec \phi \cos \theta \left\{ \frac{\sin(\phi + \theta)}{1 - \varepsilon} + \frac{\sin(\phi - \theta)}{1 + \varepsilon} \right\} \\
 &\quad + p_0(f + h) \\
 &\quad \times [\sec \phi \{ \sin(\phi + \theta) + \sin(\phi - \theta) \} - 2 \tan \phi \cos \theta] \\
 &= \gamma f^2 \sec \phi \cos \theta \frac{\sin \phi \cos \theta + \varepsilon \cos \phi \sin \theta}{1 - \varepsilon^2} \\
 &\quad + 2p_0(f + h) \cos \theta (\sin \phi \sec \phi - \tan \phi) \\
 &= \gamma f^2 \sec \phi \cos \theta \frac{\sin \phi \sec \theta}{1 - \varepsilon^2} \\
 &= \gamma f^2 \frac{1}{1 - \varepsilon^2} \tan \phi = \gamma A \dots\dots\dots(19)
 \end{aligned}$$

となって、共に大気圧 p_0 は相殺され、 $F_{-\eta}$, $F_{-\zeta}$ の座標変換から得られた(16),(17)式と同一の結果が得られることから、2.2節の圧力による力が、正しく計算されていることを確認できた。

2.5 η , ζ 方向の圧力によるモーメント

三角柱側面に垂直に働く圧力による力 P_{Left} , P_{Right} の η 方向成分によって生ずる、 o 点回りのモーメント M_η を計算することを考える。

等分布の大気圧成分⁽⁰⁾による左右両舷の ζ 軸に平行なレバー $v_{L-\zeta}^{(0)}$, $v_{R-\zeta}^{(0)}$ は、舷側長が $(f + h) \sec \phi$ だから、

$$\begin{aligned}
 v_{L-\zeta}^{(0)} = v_{R-\zeta}^{(0)} &= f - \frac{(f + h) \sec \phi}{2} \cos \phi \\
 &= f - \frac{f + h}{2} = \frac{f - h}{2} \dots\dots\dots(20)
 \end{aligned}$$

のように、左右同長として得られる。

三角形分布の静水圧成分^(γ)による左右両舷の ζ 軸に平行なレバー $v_{L-\zeta}^{(\gamma)}$, $v_{R-\zeta}^{(\gamma)}$ は、(7)式の浸水長 ℓ_L, ℓ_R を用いて、

$$\left. \begin{aligned}
 v_{L-\zeta}^{(\gamma)} &= f - \frac{\ell_L}{3} \cos \phi = f - \frac{1}{3(1 + \varepsilon)} f \\
 &= \frac{2 + 3\varepsilon}{3(1 + \varepsilon)} f \\
 v_{R-\zeta}^{(\gamma)} &= f - \frac{\ell_R}{3} \cos \phi = f - \frac{1}{3(1 - \varepsilon)} f \\
 &= \frac{2 - 3\varepsilon}{3(1 - \varepsilon)} f
 \end{aligned} \right\} \dots\dots(21)$$

となる。これにより、原点 o に関する η 方向の圧力による時計回りのモーメント M_η は、(13), (20),

(21)式を用いて、

$$\begin{aligned}
 M_\eta &= P_{Right}^{(0)} \cos \phi \cdot v_{R-\zeta}^{(0)} + P_{Right}^{(\gamma)} \cos \phi \cdot v_{R-\zeta}^{(\gamma)} \\
 &\quad - (P_{Left}^{(0)} \cos \phi \cdot v_{L-\zeta}^{(0)} + P_{Left}^{(\gamma)} \cos \phi \cdot v_{L-\zeta}^{(\gamma)}) \\
 &= \frac{1}{6} \gamma f^3 \cos \theta \left\{ \frac{2 - 3\varepsilon}{(1 - \varepsilon)^2} - \frac{2 + 3\varepsilon}{(1 + \varepsilon)^2} \right\} \\
 &\quad + p_0(f + h) \cdot (v_{R-\zeta}^{(0)} - v_{L-\zeta}^{(0)}) \\
 &= \frac{1}{3} \gamma f^3 \frac{\varepsilon(1 - 3\varepsilon^2)}{(1 - \varepsilon^2)^2} \cos \theta \\
 &= \frac{1}{3} \gamma f A \frac{1 - 3\varepsilon^2}{1 - \varepsilon^2} \sin \theta \dots\dots\dots(22)
 \end{aligned}$$

のように、大気圧 p_0 に依らず求まる。

同様に、 P_{Left} , P_{Right} の ζ 方向成分と P_{Upper} によって生ずる、 o 点回りのモーメント M_ζ を、計算する。

大気圧成分⁽⁰⁾による η 軸に平行なレバー $v_{L-\eta}^{(0)}$, $v_{R-\eta}^{(0)}$ は、

$$\begin{aligned}
 v_{L-\eta}^{(0)} = v_{R-\eta}^{(0)} &= \frac{(f + h) \sec \phi}{2} \sin \phi \\
 &= \frac{f + h}{2} \tan \phi \dots\dots\dots(23)
 \end{aligned}$$

のように、(20)式と同様、左右同長である。

静水圧成分^(γ)による左右両舷の η 軸に平行なレバー $v_{L-\eta}^{(\gamma)}$, $v_{R-\eta}^{(\gamma)}$ は、(7)式の ℓ_L, ℓ_R を用いて、

$$\left. \begin{aligned}
 v_{L-\eta}^{(\gamma)} &= \frac{\ell_L}{3} \sin \phi = \frac{\tan \phi}{3(1 + \varepsilon)} f \\
 v_{R-\eta}^{(\gamma)} &= \frac{\ell_R}{3} \sin \phi = \frac{\tan \phi}{3(1 - \varepsilon)} f
 \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots(24)$$

となる。よって、原点 o に関する ζ 方向の圧力による反時計回りのモーメント M_ζ は、(13), (23), (24)式により、

$$\begin{aligned}
 M_\zeta &= P_{Right}^{(0)} \sin \phi \cdot v_{R-\eta}^{(0)} + P_{Right}^{(\gamma)} \sin \phi \cdot v_{R-\eta}^{(\gamma)} \\
 &\quad - (P_{Left}^{(0)} \sin \phi \cdot v_{L-\eta}^{(0)} + P_{Left}^{(\gamma)} \sin \phi \cdot v_{L-\eta}^{(\gamma)}) \\
 &\quad + P_{Upper} \times 0 \\
 &= \frac{1}{6} \gamma f^3 \tan^2 \phi \cos \theta \left\{ \frac{1}{(1 - \varepsilon)^2} - \frac{1}{(1 + \varepsilon)^2} \right\} \\
 &\quad + p_0(f + h) \tan \phi \cdot (v_{R-\eta}^{(0)} - v_{L-\eta}^{(0)}) \\
 &= \frac{2}{3} \gamma f^3 \frac{\varepsilon \tan^2 \phi}{(1 - \varepsilon^2)^2} \cos \theta \\
 &= \frac{2}{3} \gamma f A \frac{\tan^2 \phi}{1 - \varepsilon^2} \sin \theta \dots\dots\dots(25)
 \end{aligned}$$

のように、 M_η と同様、大気圧 p_0 に依らず求まる。

2.6 横傾斜時の圧力中心 C_p の位置決め

圧力中心 C_p を、浮体固定の $o-\eta\zeta$ 座標系で位置決めするには、第1報⁽²⁾、第2報⁽¹¹⁾、第3報⁽²⁰⁾と同様に、大串⁽²¹⁾が用いた水理学の手法に基づいて、 η 座標 η_p は、 $-\zeta$ 方向の圧力による合力 $F_{-\zeta}$ とモーメント M_ζ により、(15),(25)式を用いて、

$$\begin{aligned} \eta_p &= \frac{M_\zeta}{F_{-\zeta}} = \frac{\frac{2}{3} \gamma f A \frac{\tan^2 \phi}{1-\varepsilon^2} \sin \theta}{\gamma A \cos \theta} \\ &= \frac{2}{3} f \frac{\varepsilon \tan \phi}{1-\varepsilon^2} \dots\dots\dots(26) \end{aligned}$$

のように、 ζ 座標 ζ_p は、 $-\eta$ 方向の圧力による $F_{-\eta}$ と M_η により、(15),(22)式を用いて、

$$\begin{aligned} \zeta_p &= \frac{M_\eta}{F_{-\eta}} = \frac{\frac{1}{3} \gamma f A \frac{1-3\varepsilon^2}{1-\varepsilon^2} \sin \theta}{\gamma A \sin \theta} \\ &= \frac{1}{3} f \frac{1-3\varepsilon^2}{1-\varepsilon^2} \dots\dots\dots(27) \end{aligned}$$

のように定めることができる。この ζ_p は、(27)式に示す通り、傾斜角 $\theta \rightarrow 0$ で 0 となるゼロ因子 $\sin \theta$ が、分母と分子で相殺することで得られている。当初から、 $\theta=0$ として直立状態で計算すれば、分母の $F_{-\eta}$ も分子の M_η も、共に平衡してゼロとなるから、不定形となって、 ζ_p を確定できない。これが、横傾斜させることで、圧力中心位置を確定できた所以である。

これに対し、(26)式の η 座標 η_p は、 $\theta \rightarrow 0$ としても、分子の M_ζ は平衡してゼロとなるが、分母の $F_{-\zeta}$ は浮力の余弦成分として有限値を取るから、当初から直立状態で計算しても、 $\eta_p=0$ として、求まる訳である。

得られた浮体固定座標での圧力中心 C_p (η_p, ζ_p) を、空間固定の座標系 (y_p, z_p) に変換してみる。水平方向の y_p は、

$$\begin{aligned} y_p &= \eta_p \cos \theta - \zeta_p \sin \theta \\ &= \frac{1}{3} f \frac{2\varepsilon \tan \phi \cos \theta - (1-3\varepsilon^2) \sin \theta}{1-\varepsilon^2} \\ &= \frac{1}{3} f \frac{2 \tan^2 \phi + 3\varepsilon^2 - 1}{1-\varepsilon^2} \sin \theta \dots\dots\dots(28) \end{aligned}$$

のように、鉛直方向の z_p は、

$$\begin{aligned} z_p &= \zeta_p \cos \theta + \eta_p \sin \theta \\ &= \frac{1}{3} f \frac{(1-3\varepsilon^2) \cos \theta + 2\varepsilon \tan \phi \sin \theta}{1-\varepsilon^2} \\ &= \frac{1}{3} f \frac{(1-3\varepsilon^2) + 2\varepsilon^2}{1-\varepsilon^2} \cos \theta \\ &= \frac{1}{3} f \cos \theta \dots\dots\dots(29) \end{aligned}$$

のように求まる。後者の鉛直方向の z_p は、水面を底辺とする、高さ $f \cos \theta$ の三角形の、鉛直方向の図心位置を示していることは、明らかであるから、前者の y_p についても、水平方向の図心位置に一致するかを、次節で検証する。

2.7 水面下の三角形の図心位置による検証

図3は、図2の三角柱の横断面の、水面下の面積を抽出したものである。三角形の頂点 K と、その鉛直上方に取った原点 o' を結ぶ z' 軸によって、 $\Delta K T_L T_R$ を左右2個に分割して考える。

左側 (Left) の三角形 $\Delta K o' T_L$ の面積を A_L 、底辺を y_L 、右側 (Right) の三角形 $\Delta K o' T_R$ の面積を A_R 、底辺を y_R とする。高さは共通で、 $o'K = Z_f$ である。

このとき、左右それぞれの面積 A_L, A_R は、

$$\left. \begin{aligned} A_L &= \frac{1}{2} Z_f y_L \\ A_R &= \frac{1}{2} Z_f y_R \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots(30)$$

である。両者の和である $\Delta K T_L T_R$ の面積 A は、

$$\begin{aligned} A &= A_L + A_R \\ &= \frac{1}{2} Z_f (y_L + y_R) \\ &= \frac{1}{2} Z_f (b_L + b_R) = \frac{1}{1-\varepsilon^2} f^2 \tan \phi \dots\dots(31) \end{aligned}$$

のように、2.1節の(10)式によって求められる。

また、底辺に相当する y_L, y_R は、それぞれ ϕ と θ を用いて、

$$\left. \begin{aligned} y_L &= Z_f \tan(\phi - \theta) = Z_f \frac{\tan \phi - \tan \theta}{1 + \varepsilon} \\ y_R &= Z_f \tan(\phi + \theta) = Z_f \frac{\tan \phi + \tan \theta}{1 - \varepsilon} \end{aligned} \right\} \dots\dots(32)$$

である.

三角形 $\Delta KT_L T_R$ の, z' 軸に関する面積モーメント M_z' は, 分割した左右それぞれの三角形 $\Delta K o' T_L$, $\Delta K o' T_R$ の図心 g_L, g_R までの, z' 軸からの水平距離がレバーとなるから,

$$M_z' = A_R \times \frac{y_R}{3} - A_L \times \frac{y_L}{3} = \frac{1}{6} Z_f (y_R^2 - y_L^2) \dots\dots\dots(33)$$

によって, 求め得る. y_L, y_R に (32)式, Z_f に (12)式を用い, ε が(5)式であることを使って, 計算を進めると, M_z' は,

$$M_z' = \frac{1}{6} Z_f^3 \left\{ \frac{(\tan \phi + \tan \theta)^2}{(1 - \varepsilon)^2} - \frac{(\tan \phi - \tan \theta)^2}{(1 + \varepsilon)^2} \right\} = \frac{1}{6} Z_f^3 \frac{4 \varepsilon \sec^2 \phi \sec^2 \theta}{(1 - \varepsilon^2)^2} = \frac{2}{3} f^3 \frac{\tan \phi \sec^2 \phi}{(1 - \varepsilon^2)^2} \sin \theta = \frac{2}{3} f A \frac{\sec^2 \phi}{1 - \varepsilon^2} \sin \theta \dots\dots\dots(34)$$

のように, (31)式の A を用いて, 求まる.

これによって, 三角形 $\Delta KT_L T_R$ の図心 G の, z' 軸からの水平距離 y_G' は, (34)式の M_z' を, 面積 A で除すことにより,

$$y_G' = \frac{M_z'}{A} = \frac{2}{3} f \frac{\sec^2 \phi}{1 - \varepsilon^2} \sin \theta \dots\dots\dots(35)$$

のように, 定まる.

よって, 図心 G の元々の z 軸からの水平距離 y_G は, 両原点間の距離 $o'o$ が,

$$o'o = b_L - y_L = f \sin \theta \dots\dots\dots(36)$$

であるから,

$$y_G = y_G' - o'o = y_G' - f \sin \theta = \frac{1}{3} f \frac{2 \sec^2 \phi - 3(1 - \varepsilon^2)}{1 - \varepsilon^2} \sin \theta = \frac{1}{3} f \frac{2 \tan^2 \phi + 3 \varepsilon^2 - 1}{1 - \varepsilon^2} \sin \theta \dots\dots\dots(37)$$

のように, 求められる.

一方, y 軸から図心 G までの鉛直距離 z_G は, $\Delta KT_L T_R$ が, 水面 (y 軸) を底辺とする, 高さ $Z_f = f \cos \theta$ の三角形であるから, 計算するまでもなく,

$$z_G = \frac{1}{3} f \cos \theta \dots\dots\dots(38)$$

である.

よって, (28)式と(37)式, (29)式と(38)式を, 見較べることにより,

$$\left. \begin{aligned} y_P &= y_G \\ z_P &= z_G \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots(39)$$

であることが分かった.

この結果は, 横傾斜時の左右非対称な三角形断

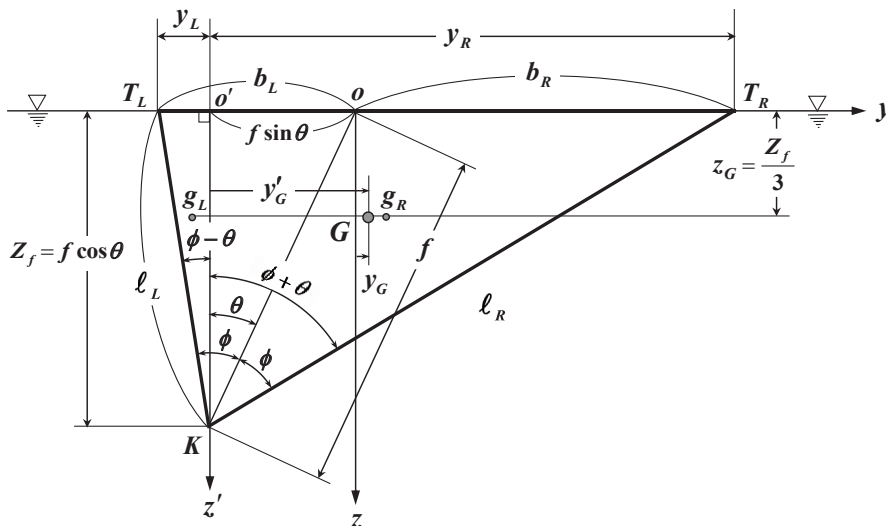


図3 水面下の三角形断面の図心位置

面の圧力中心が、水面下の図心に一致することを示しているから、圧力中心が、周知の浮心位置であることを証明できた。

2.8 直立時の圧力中心 C_p の位置決め

前節の(39)式で得られた帰結を、明確にするために、傾斜状態で得られた圧力中心 C_p の座標 (η_p, ζ_p) において、 $\theta \rightarrow 0$ とすることで、直立状態の三角柱の圧力中心を求めてみよう。

(5)式の ε は、横傾斜角を $\theta \rightarrow 0$ とすると、

$$\varepsilon \Big|_{\theta=0} = \tan \phi \tan \theta \Big|_{\theta=0} = 0 \quad \cdots \cdots \cdots (40)$$

であるから、2.6節の(26),(27)式により、

$$C_p(\eta_p, \zeta_p) \Big|_{\theta=0} = \left(0, \frac{f}{3} \right) \quad \cdots \cdots \cdots (41)$$

のように、或いは、 $\theta \rightarrow 0$ では、 $o-\eta\zeta$ 座標系と $o-yz$ 座標系は一致するから、(28),(29)式によっても、同様に、

$$C_p(y_p, z_p) \Big|_{\theta=0} = \left(0, \frac{f}{3} \right) \quad \cdots \cdots \cdots (42)$$

のように求まる。この(41),(42)両式は、明らかに、水面下の二等辺三角形の図心位置を示していることから、三角柱に対して、静水圧の圧力中心が、周知の浮心位置であることを、証明できた。

3. 後書き

第1報(矩形断面⁽²⁾)、第2報(任意の断面形状⁽¹¹⁾)、第3報(半没円柱⁽²⁰⁾)に続いて、この第4報では、三角柱に対しても、静水圧の圧力中心が、周知の浮心位置(三角形の図心)に一致することを、証明した。

謝辞

著者が前職(九州大学 応用力学研究所 津屋崎海洋災害実験所)に赴任した1987年頃、当時の実験所長だった、故大楠丹先生が、夜の博多の街の酒席で「浮心というのは、圧力中心ではないのじゃないか?」と、話されたことを思い出します。

その言葉が、頭の深層に残っていて、現職で「浮体静力学」の講義を担当することになり、本稿の

研究テーマに取り組む契機になったことを実感し、先生の慧眼に、今更ながら敬意を捧げて、本稿を閉じます。

参考文献

- (1) ARCHIMEDES : The Works of Archimedes , On Floating Bodies, Book I & Book II, Edited and Translated by T. L. HEATH, Cambridge University Press, pp.253~300, 1897.
- (2) 堀 勉 : 静水圧の圧力積分による船の浮心位置の決定 — 浮心=圧力中心の証明 —, 日本航海学会誌, 第203号, pp.90~94, 2018年1月.
- (3) 小松 正彦 : 浮体に働く浮力の作用中心に関する考察, 舟艇技報, No.93, pp.21~25, 2007年12月.
- (4) 瀬戸 秀幸 : 「浮心」考 — 小松 : 浮体に働く浮力の作用中心に関する考察の再検討 —, 第14回推進性能・運動性能合同研究会, 2010年.
- (5) 瀬戸 秀幸 : 浮力の作用中心に関する一考察, 日本船舶海洋工学会 講演会論文集, 第12号, pp.529~532, 2011年5月.
- (6) 鈴木 勝雄 : 神説「浮心の法則」, 2011年1月.
- (7) 芳村康男, 安川宏紀 : 浮力の作用中心と復原性の再考, 第16回推進性能・運動性能合同研究会, 2011年.
- (8) 小松 正彦 : 座標変換による浮力の作用中心に関する考察, 第19回推進性能・運動性能合同研究会, 2012年.
- (9) 渡辺 倫堂 : 船体周りの圧力分布と浮心の関係に関する研究, 防衛大学校 機械システム工学科 船舶工学講座 卒業論文, (指導) 藪下和樹, 岡畑 豪, pp.1~25, 2013年3月.
- (10) 慎 燦益 : 造船幾何学 — 造船設計の基礎知識 —, 第4章 排水量等計算と曲線図, 4.2 アルキメデスの原理, 海文堂, pp.125~133, 2013年2月(初版).
- (11) 堀 勉 : 静水圧の圧力積分による船の浮心位置の決定 — その2 : 任意の断面形状の場合 —, 日本航海学会誌, 第205号, pp.28~34, 2018年7月.

- (12) 堀 勉：「浮体静力学」の基礎理論に対する新展開 — その1：「浮心=圧力中心」の証明 —，舟艇技法，第135号，pp.1～10，2018年9月。
- (13) 一色 浩：Pressure Center，2018年3月。
- (14) 藪下 和樹：船舶の復原及び推進性能(2018年度版)，第4章 浮力と圧力分布の関係，防衛大学校 機械システム工学科 テキスト，pp.81～90，2018年4月。
- (15) 藪下 和樹，日比 茂幸，岡畑 豪：物体周りの圧力分布による浮心位置の同定，第10回 推進・運動性能研究会，pp.1～14，2018年6月。
- (16) 鈴木 勝雄：見かけの浮心について — 堀論文⁽²⁾に関連して —，2018年4月。
- (17) 小松 正彦：浮体に働く浮力の作用中心に関する考察(続報)，舟艇技法，第136号，pp.12～18，2018年12月。
- (18) 小松 正彦：圧力分布に着目した浮体の「浮力の作用中心」，第13回 推進・運動性能研究会，pp.1～22，2019年6月。
- (19) 一色 浩：浮心について，日本船舶海洋工学会講演会 論文集，第28号，No. 2019S-OS2-9，pp.131～132，2019年5月。
- (20) 堀 勉：静水圧の圧力積分による船の浮心位置の決定 — その3：半没円柱に対する証明 —，日本航海学会誌，第208号，pp.60～68，2019年4月。
- (21) 大串 雅信：理論船舶工学(上巻)，1.3 浮力の例題，海文堂，pp.4～5，1971年6月(初版)。

令和2年5月5日 投稿



堀 勉

正会員 長崎総合科学大学 工学部 船舶工学コース 教授 (☎851-0193 長崎市 網場町 536)
 E-mail : HORI_Tsutomu@NiAS.ac.jp, HomePage : <http://www.ship.nias.ac.jp/personnel/horiken/>
 1987年 大阪大学 大学院 工学研究科 造船学専攻 博士後期課程 修了，工学博士
 所属学会：日本航海学会，日本船舶海洋工学会の各会員； 研究テーマ：水面波動力学

巻頭言

- 会長退任のご挨拶 / *Retirement Greetings from President of JIN* 織田 博行 / *Hiroyuki ODA* ... (1)
 副会長退任にあたって / *On Retiring from a Vice President* 下川 伸也 / *Shinya SHIMOKAWA* ... (2)
 会長就任のご挨拶 / *Inaugural Address of the President* 庄司 るり / *Ruri SHOJI* ... (3)

教育・研究機関紹介

- 北海道大学水産学部と練習船おしよ丸の役割 / *The Roll of OSHORO Maru in the Hokkaido University Fisheries Sciences*
 星 直樹・木村 暢夫 / *Naoki HOSHI and Nobuo KIMURA* ... (4)

海事博物館紹介

- 日本郵船歴史博物館の紹介 / *Introduction of NYK Maritime Museum* 堀江 誠 / *Makoto HORIE* ... (9)

研究室紹介

- 水産大学校海洋生産管理学科 漁船運用学研究室
 / *National Fisheries University Department of Fishery Science and Technology Fishing Boat Seamanship Laboratory* 酒井 健一 / *Kenichi SAKAI* ... (18)

- 大学等奨学褒賞 (22)

解説・展望

- PSC (Port State Control) の実際と対応 ~ 管理船における受検とその対応 ~ / *Inspection and take action to the result at PSC for management vessels.*
 上月 敏彰 / *Toshiaki KOZUKI* ... (33)
 実数の連続性と級数の極限 - 極限值と循環小数の話 - / *The Continuity of Real Number and Limit of the Series - Limiting Value and Recurring Decimal -*
 岩本 才次 / *Seiji IWAMOTO* ... (40)

研究・調査

- 静水圧の圧力積分による船の浮心位置の決定 — その4 : 三角柱に対する証明 —
 / *A Positioning on Ship's Centre of Buoyancy Derived by Surface Integral of Hydrostatic Pressure — Part 4 : The Proof for Triangular Prism —*
 堀 勉 / *Tsutomu HORI* ... (50)
 AIS と VHF のデータ収集システム構築の記録とこれから / *A Development of AIS/VHF collecting System and Future*
 鈴木 治・吉田 南穂子・今井 康之・富山 貴史・Cemil Yurtören・瀬田 広明
 / *Osamu SUZUKI, Nahoko YOSHIDA, Yasuyuki IMAI, Takashi TOMIYAMA, Cemil Yurtören and Hiroaki SETA* ... (59)

- Transactions of Navigation Vol. 5 Issue1 (2020) (68)

- 事務局だより (69)

- 2020年度 定時総会 (72)

- 投稿要領 (97)